

随 想 犬 の 遠 吠 え

前 川 正 信*

何でもかまわぬからとの編集主幹の暖いおことばに甘え、ここ数回の参院選のつど、淳のようにわが胸につかえわが脳裡を去らぬ想いを、見当違いも場違いも承知のうえで、ここにしるすことをお許し願いたい。

参院選候補者の顔写真が津々浦々にはり出される中に、海軍の飯を1日でも食った者には忘れられない顔が今回もある。それはG元海軍大佐で、私はこの人のポスターを何とも物悲しい気持ちで眺める者の1人である。この人は空母部隊によるハワイ空襲を着想し、起案し、かつ実施部隊の航空参謀としてこれを直接指導した。敗戦前の1時期四国松山で新鋭戦闘機紫電で編成された部隊を指揮し、米空母艦載機グラマン部隊（ゼロ戦では大刀打ちできなかった）と互格以上に渡り合った旧海軍将校としてはきわめて幸福な輝しい経歴（戦闘で不敗）の持主である。戦後は航空自衛隊の幹部としてジェット機の操縦を習得し、栄進して空幕長に至り、三転して参院議員として今日におよんでいる。このしたたかな転身の華麗さ（本人にしてみれば一貫して空の戦いを続けているにすぎない）は、日本人としては他に類例を見いだしがたく、ほとんど驚嘆に値する。

もとより人はいろいろな生き方を選ぶことができる。東條の陸軍次官であったT中將は比島方面陸軍航空部隊指揮官であったが、負けいくさの中に部下をほうり出してまっさきに逃げた。おれは有能な陸軍のエリートだから生きる、やるべき仕事があるというTの考え方もわからないではないが、時と場合によりけりで、陸軍には阿南陸相をはじめ立派に死んだ指揮官が多いのに、こんな男が中央で次官として人事を握っていたのでは死んでも成仏できまい。アッツ島の山崎大佐はTの同期生で渡島前に次官室を訪れ激励を受けている。死地に赴く者を送る言葉は、「おれもあとから行くからなあ」の一言以外にはなかったろうに、ミッドウェーの負けいくさでは司令官の山口少將と空母艦長加来大佐は退艦を断わり、ともに沈んだ。艦長を育

てるのに30年かかっていた海軍では、空母艦長はとくに貴重であると考えていた。しかし退艦して生きたとてどうなる。どのつらさげて再び部下を死地にやるか。このことは退艦をすすめる者にも断わる者にも痛いほどよくわかっていたはずだ。沖縄特攻機部隊指揮官の宇垣中將は8月15日朝、爆撃機で南方に飛び去った。特攻作戦生みの親大西中將は切腹した。生存者では、海軍次官として終戦工作をした井上大將は戦後いっさい世に出ず、黙して語らない。真珠湾攻撃飛行隊長淵田大佐は牧師になった。大佐以上の階級の士官には指揮官として中佐以下の士官とは質的に異なる責務があるから、公人としてその進退を批判されてもしかたがない。そのような地位にG大佐はいた。しかし戦後の軍隊再建に、負け犬意識のない幹部将校が必要であった事情は理解できるし、そうこうするうちに内部での陸海出身者のバランスとか、決着のつかぬ防衛力論議で沈黙したら負けだとか、自民党の事情やら、防衛庁との関係やら、事情は錯綜して複雑に関連し、そのうちどれ一つ、かれの自由にはなくなってしまうたのだろう。いったいどのように生きようと他人様がとやかきうことはあるまい。まして選挙という試験に一度ならず合格したのだから何をしたらよいではないかと周囲の人たちは蟠川氏と同じことをいうだろう。もう勝手にせい。

最近、寛容の美徳が選挙のポスターのようにゆきわたり、どこへ行っても責任のとり方などかたくなるしいことを、きびしくいわずまあまあですむようになったのは、ある意味ではありがたい。そして武士の美意識は口にするのも気恥かしいこのごろだ。大学人もこの風潮の受益者で、ちゃんと恩恵にあずかっているし、そのうえこれだけ吠えればややスッとする思いもあるのはさらにありがたい。

それでは、よき祖国日本の万歳を再三遍唱えて筆をおこう。

* 大阪市立大学教授（泌尿器科学）